# ー 経験キャリアシート ー

## 長期(数年)の経験を振り返る

| | | 経験学習 | | 仕事の姿勢 |
|---|---|---|---|---|
| | | 経験 | 学び | |
| キャリア | 最初の3年間 | 経済雑誌の編集部で記者として働いたが、そもそも記者になるつもりはまったくなかったため、はじめの3年ぐらいは、非常に苦労した。それでも優秀な先輩記者（入社3年目）が懇切丁寧に指導してくれ、評価される記事が書けるようになった。 | 試行錯誤を繰り返し、また先輩の指導もあり、インタビューの技術が向上した。また、最大の情報源は人であることを理解し、取材のネットワークを広げることに力を注ぐようになった。 | とにかく、はじめは「記者である自分」を受け入れて折り合いをつけることで精いっぱいだった。はじめて評価される記事を書いたのは2年目だったが、それからコンスタントにいい記事が書けたわけではなく、仕事が面白くなくてサボったり、転職活動をしたこともあった。結婚して子供が産まれ、まじめに仕事に取り組もうと思うようになった気がする。 |
| | 20代の後半 | ある巨大流通グループの厳しい経営実態につきスクープ記事を書き、社内外で評価された。この体験によって、記者という仕事が、自分に向いていなくもないと感じるようになった。 | 書いた記事のインパクトが大きいと、それを契機に有力な情報ネットワークができることを知った。また財務で企業を評価する重要性を知った一方で「利益だけが企業を評価する指標なのか」という問題意識も持つようになった。 | 評価される記事を何本か書くうちに、「記者である自分」と折り合いがつけられるようになり、仕事に面白みを感じるようになった。経営者の謦咳に触れることも、貴重な体験であり、年代を超えて信頼関係が生まれることの楽しさも知った。 |
| | 30代の後半 | 担当業種が流通業から家電に変わり、ものづくり産業・企業の取材を通して、日本企業の強さについて目が開かれた。 | 反響の高い記事を書き、同業他社からヘッドハンティングの声がかかった。それは断ったが、メディア企業のアグレッシブな人材マネジメントの一端に触れ、自分の会社の「ぬるさ」に不満を覚えるようになった。 | 雑誌のモデルチェンジの作業に関わって、取材して記事を書く記者としての仕事だけでなく、編集的な仕事の面白さを知った。読者に支持され、部数を伸ばすためのマネジメントに問題意識を持つようになり、「部数で日本一の経済誌になるためにどうすればいいか」を考えるようになった。 |